高校英語教育に，単語集は不要か？
――第二言語習得（SLA）研究と現場の声から考える

鈴木　祐一

1．単語集は英語学習の「神話」？

本誌 105 号（2024 年 11 月）に，高橋潔先生（慶應義塾大学名誉教授）が「『単語以上文以下』のもつ重み」という一文をお寄せになっています．

冒頭に，こんな告白があります．高校時代，当時大人気だった「赤尾の豆単」こと『英語基本単語集』（旺文社）を，数百歩ごとに 1 単語ずつ頭に叩き込むと決意し，英語らしい発音でつぶやきながら，赤鉛筆を舐めながら，全ページを 10 回あまり繰り返し，その 1 冊はボロボロになった．高橋先生は，「若さと無知に任せてひどく頑張った時期があった」と振り返っておられます．

高橋先生は，こうした学び方を「**日本の英語学習の神話**」と呼びます．単語帳で片っ端から単語を覚え，文法書で規則を叩き込み，その規則に従って単語を並べて文をつくる．これが正しい外国語の学び方だ，という思い込みのことです．そして，かなり強い言葉が続きます．このやり方は，膨大な語彙と規則を扱えるコンピュータになら可能かもしれないが，生身の「普通人」にはできない．あるいは「非人間的」と言ってもいい，と．

読みながら，私は自分の高校時代を思い出していました．2000 年代のことです．学校で一斉に配られた単語集があり，毎週の授業で単語テストがありました．朝の電車で単語集を片手に覚え，休み時間にもう一度開いて，テストに備える．赤鉛筆こそ舐めませんでしたが，やっていたことは高橋先生とさして変わりません．そしておそらく，先生方の教室にも，今まさに同じことをしている生徒が座っているはずです．

長く受け継がれてきたこの学び方を，高橋先生は「神話」と呼んで疑いました．しかも高橋先生は，単語集を執筆された方でもあります．つくった側の人が，自分のつくったものの前提を問い直している点に魅力を感じます．

では，高橋先生の結論はどこにあるのでしょうか．記事の終盤で，「私たちの頭の中の語彙の多くは，決まって一緒に用いられる語の組み合わせからできていて，一方が現れれば，もう一方も予測できる」と述べ，「英語の単語の習得は相応しい文脈の中で行うべきだ」と考察されています．つまり，単語をバラバラに覚えるのではなく，**コロケーション（連語）学習が大切だ**ということになります．

このコロケーション学習について，私の専門である第二言語習得研究（Second Language Acquisition，略して SLA）から，まず考えてみたいと思います．

2．SLA 研究とは何か

SLA 研究は，人が母語以外の言語をどのように身につけるのかを，実証的に調べる分野です．1970 年代に本格的に立ち上がり，言語学・心理学・教育学が交差するところで発展してきました．学習者が何を，どの順序で身につけるのか．どんな条件で定着し，どんな条件で忘れられるのか．こうした問いを，実験や調査のデータで確かめていきます．

そして，語と語の結びつき――コロケーションの習得は，この分野が取り組んできた中心的なテーマの一つです．

コロケーションを含む**定型表現（formulaic sequences）が言語使用に占める割合は，私たちの直感よりずっと大きく，50–80%**という試算があります．たとえば「濃いコーヒー」は ***strong coffee*** であって ***thick coffee*** ではありません．「雨が強い」は ***heavy rain***，「傘をさす」は ***open an umbrella.*** 日本語から一語ずつ置き換えていっても，この組み合わせにはたどり着けません．

高橋先生も，街で見かけた「館内飲食禁止」の英語表示 ***No drinks and foods in the hall*** を取り上げ，複数の辞書を引き比べました．英語では ***food***

and drink の順が原則で，これは *bread and butter*, *black and white* と同じ仲間です．日本語は「飲食」で順序が逆ですから，母語の語順がそのまま干渉するわけです．

母語話者の産出のかなりの部分は，その場で組み立てられたものではなく，すでにまとまったカタマリで引き出される．母語話者の流暢さの正体の一つはここにあります(詳しくは中田達也先生の『英語は決まり文句が 8 割』講談社現代新書)．

3．では，語彙はどうやって身につくのか

コロケーションが大切だ，というところまでは，誰もが賛同するでしょう．問題はその先です．**SLA 研究に基づくと，語彙はどうやって身につくのでしょうか．**

語彙研究の大家である，ポール・ネイション(Paul Nation)は，バランスの取れた語彙指導には，4 つの要素(ストランド，strand)が必要で，それぞれにほぼ同じだけの時間を割くべきだと提案しています．

① **意味重視のインプット：内容を理解するために読む・聞く(例：多読，多聴)**
② **意味重視のアウトプット：内容を伝えるために話す・書く**
③ **流暢さの育成：すでに知っている言語材料をより素早く使えるようにする練習**
④ **言語重視の学習：語彙・文法表現を意図的に学ぶ**

この枠組みで見ると，単語集の位置ははっきりします．**単語集は 4 番目のストランドの道具です．** 4 分の 1 を占める，れっきとした構成要素であって，不要なものではありませんが，**4 分の 1 の一部としてしか，単語集は機能しないということです．**

リストで *food and drink* を覚えることはできます．しかし，それを実際に読む中で何度も見かけ(①)，書いたり話したりする中で自分で使い(②)，考えなくても出てくるまで繰り返す(③)という過程を経なければ，「語彙を使いこなせる」状態にはなかなかなりません．

チャンク単位の単語集は，すでに数多く市販されています．それでも状況が大きく変わったようには見えないのは，**教材を 4 番目のストランドに置いたまま，残り 3 つとの関連が見いだせないのが一因かもしれません．**

4．単語集の役割とは，何だったのか

ここで，単語集そのものに目を向けてみます．

(1)「上乗せ分」は，1.2 ポイント

検定教科書と単語集の語彙の特徴を調べる無料ツール『VocabMatch』で分析したところ，興味深い結果が出ました．採択率の高い検定教科書 1 冊だけで，大学入学共通テストの英文語彙の 94.6％をカバーしていたのです．

そこに定番の単語集を加えると，カバー率は 95.8％．**単語集が担っている上乗せ分は，わずか 1.2 ポイント**でした．しかも，単語集を別の 1 冊に差し替えて計算し直しても，数値はほとんど動きません．

共通テストに繰り返し出てくる高頻度語の核は，教科書の段階ですでに押さえられている，ということです．教科書には基礎語彙が文脈の中で繰り返し登場し，読む・聞く・書く・話す活動を通じて出会う機会もあります．

つまり単語集は，本来「補助教材」だったはずです．教科書に出てこない語を補うのが役割であって，語彙学習の中心ではありません．

(2)「一冊終わらせる」ことは，本当に必要か

この視点に立つと，優先順位はこうなります．

① **まず，教科書の語彙をしっかり定着させる．**最も効率のよい土台づくりです．ここが固まっていなければ，単語集を何冊やっても砂上の楼閣になりかねません．

② **単語集では，教科書でカバーしきれない語彙を補う．**単語集すべてを終わらせることよりも，本当に必要な基礎語彙を確実に定着させることが優先順位は先です．

③ **残りの未知語は，長文読解を通じて文脈から推測する力を養う．**これは受験でも求められる読解力そのものです．

「一冊終わらせた」という達成感は，生徒にとって大きなものです．ただ，それ自体が目的だったわけではないはずです．

(3)それなのに，力の入れ方は逆になっている

私が行った高校での語彙指導における実態調査では，8 割以上の学校が単語集のテストを行っている

ことが分かりました(アルク『英語の先生応援マガジン』2025 年 11 月号)．一方で，**教科書ベースの単語テストを実施している学校はわずか 2 割**でした．授業の中心であるはずの教科書の語彙定着をテストして定着させる機会が，意外にも(？)多くないのです．

土台が固まる前に，上乗せの方に力を注いでいる．この構図には，考えるべきものがあると思います．

5．単語集を使うなら，どう使うか

では，単語集を使うのであれば，どうすればよいのでしょうか．2 つ挙げます．

⑴テストのスケジュールを見直す

先述の実態調査では，単語テストの頻度は「週 1 回」が約 7 割，範囲は 50 語または 100 語が大多数でした．授業時間を圧迫せず，生徒にも無理のないペースで，一見すると合理的です．

しかし，この形には落とし穴があります．**一度テストした範囲が，二度と出題されない**．SLA 研究では，詰め込みで覚えた単語の意味は 10 日後に約半分が忘れられるというデータが示されています．4 月の小テストのために覚えた単語は，7 月の学期末にどれくらい残っているでしょうか．

対策は単純です．新しい範囲に加えて，既習範囲からも毎回一定数を出題する**累積テスト**を取り入れるのです．最近の SLA 研究では，累積テストが長期的な記憶を促すことが実証されており，通常のテストの 3 倍の語を覚えていたという報告もあります．**スケジュールを一工夫するだけで，教師の手間はほとんど増えません**．ところが，累積テストを採用している学校は約 2 割にとどまります．

さらに一歩進めるなら，**ランダムテスト**という形もあります．累積テストには，回を重ねるほど初期の語ばかりが復習され，後半で習った語の出番が少なくなるという弱点があります．学習済みの全範囲から毎回ランダムに出題すれば，どの時期に習った語にも同じだけ復習の機会が回ります(図 1)．

⑵覚えた語が使われる場面に，触れさせる

高橋先生の「相応しい文脈の中で」は，ここに戻ってきます．生成 AI を使って，単語集の範囲の語を指定して，それらを使った簡単な英語の読み物を作らせて読ませる高校の先生もいらっしゃいます．

通常のテスト(非累積テスト)

単語	小テスト 1	小テスト 2	小テスト 3
31～45			
16～30			
1～15			

累積テスト(累積する出題範囲から 15 問)

単語	小テスト 1	小テスト 2	小テスト 3
31～45			
16～30			
1～15			

無作為抽出テスト(全ての出題範囲から 15 問)

単語	小テスト 1	小テスト 2	小テスト 3
1～45			

図 1　3 つのテスト形式

鈴木祐一(2024)『あたらしい第二言語習得論：英語指導の思い込みを変える』(研究社)より転載

6．勇気をもって「やめる」ことも一つの選択肢

先日，高校英語教員向けのセミナーで，実際に単語テストを全廃した先生のお話を伺いました．テストのための勉強に終始してしまい，発信につながらない．そこで全廃したところ，生徒それぞれが自分のペースで進めるようになり，結果的にそちらの方が伸びたのではないか，と．単語集をやめて，その時間を多読に回したという先生もいらっしゃいました．

同僚との調整があり，「単語テストはやるもの」という慣習がある中で，これを決断するには並大抵ではない勇気と努力が要ります．

ただし，**やめること自体が目的ではありません．空いた時間を何に充てるかが大切です**．4 つのストランドが，その設計図になります．

そして，繰り返しますが，これはあくまで**優先順位**の話です．教科書の重要語彙が身についていけば，そこから単語集で語彙を増強していくことは，もちろん大切です．その語彙の補強に，単語集が最適かどうかは，ケースバイケースでしょう．

7．おわりに

単語集は不要か？不要だと切り捨てるのは簡単でしょう．話はそんな単純ではなく，やはり使い方次第．ただ，その使い方を生徒に教えられるのは，教師です．限られた時間をどう配分するかは，目の前の生徒を知っている先生方にしか決められないことです．

(早稲田大学国際教養学部 准教授)